



2011年8月19日発行

赤レンガ通信

「赤レンガをいかす会」

この通信は皆様のカンパ金で作成・送付しています。感謝！
NO.4

〒272-0823 千葉県市川市東菅野 5-8-21-201(いちぶんネット内)

TEL047-339-7809 FAX47-339-7810 メール akarenga_2010@yahoo.co.jp

赤レンガ見学会と市民ディスカッション 開催！

「赤レンガをいかす会」 代表・吉原廣

赤レンガ見学会がようやく実現しました！

待ち望んだ「赤レンガ見学会」がようやく実現します。

赤レンガの存在が広く知れ渡るにつれて、「ぜひ内部を見学したい！」という声が数多く寄せられていましたが、県の事情で長く閉鎖されていたものです。

しばらく会えなかった赤レンガは3・11東日本大震災にも耐え抜きました。昨年度実施された所内土壌調査の結果、検出された有害物質は危険な数値ではありませんでした。

一方、旧血清研究所跡地に関して、県としての再利用の方針は全くなく、また、かつて譲渡を希望していた市川市も現在極めて消極的な対応に終始しています。

このままでは「塩漬け」状態になるか、民間払い下げという事態となる可能性もあるのですが、こうした時期に県の健康福祉政策課のご協力の下、「赤レンガ見学会」と「市民ディスカッション」が実現したことで、改めて市民の関心と要望を確認することの意義は大変大きいと思います。

赤レンガは猛暑の中、皆さんの訪問を静かにジッと待っています。

ぜひ会いに行行ってやってください。

赤レンガ見学会

2011年9月24日(土)10時～13時

申し込み不要、無料(カンパをお願いします)。

参加される方は直接現地においでください。広場にてパネル展示や説明会を行います。

少雨決行、荒天中止。駐車場は用意できません。

なお、危険防止のため、赤レンガ建築内への入場者数は制限され、また敷地内には立ち入り禁止区域もありますので、当日は会の係員の指示に従って行動していただきますようお願いします。

交通アクセス

JR 市川駅北口バス停 1番「松戸車庫行」乗車 8分。真間山下(50円安い)か和洋女子大学前下車。徒歩 2分。



赤レンガ市民ディスカッション ～赤レンガを語ろう！～

続いて同日 14時～16時 お隣りの和洋女子大学南館9階大会議室

赤レンガの思い出、その歴史、近辺の戦跡や名所、保存方法や有効再生のイメージ…などを語り合っ、これからの赤レンガの有効保存活動の進め方を深めたいと思います。

なお、開催前の会場にて13時～14時「市川の古い情景記録映像」を投影できるように準備中です。昼食を摂っていただきながらご覧いただけます。昼食・飲料は各自ご用意ください。

赤レンガ調査中間報告(ダイジェスト) 赤レンガはますます宝物

2011年8月1日 調査員・高木彬夫

市川市国府台、旧千葉県立血清研究所構内の赤レンガの建物は、2002年に血清研究所が閉鎖された後、他人の目に触れる機会も無くひっそりと遺っている。

陸軍教導団が集結し国府台に拠点を置いた明治18年からその役割を終え解体した明治32年まで、引き続き陸軍の駐屯地として太平洋戦争の終結した昭和20年まで、その後血清研施設として利用されてきた歴史の中で殆ど無傷で残っていることは不思議ともいえる。

明治37年築とされてきた建築年代がその後の検証で更に旧く、明治18年築の可能性も見えてきた。とすると、千葉県内に残る赤レンガ建ての建築物としては最も古いことになる。私たちはこの建築物の全容を明らかにすることが非常に重要であると考えた。

調査の第一段階として、建築基本図を作成するための予備調査を行った。

調査員 責任者 藤谷陽悦(日本大学生産工学部 建設工学 教授)
高木彬夫(日本建築家協会会員)、安達文宏(日本建築家協会会員・保存部会)、
日大藤谷研究室学生、和洋女子大中島研究室学生、恒松龍兵(記録撮影)

調査日 2010-11-25 13:00~17:00、2010-12-21 13:00~17:00

調査の方法 全体および各部を可能な限り(見える範囲)実測して整理、作図した。(右図参照)



第15回戦争遺跡保存全国シンポジウム横浜大会に参加して

報告と感想

2011年8月11日 高野邦夫

標記の集會に8月6日(土)～8日(月)の3日間、早起きして慶応大日吉キャンパスに通った(3日目は戦跡めぐり＝貝山壕見学のため京急線追浜駅に集合)。「戦争遺跡保存全国ネット」の存在とその活動は従来より知っていたが、今回初めて「赤レンガをいかす会」の今後の活動のためにもと考え、無理して(健康状態他)参加した。

大会テーマは「戦争遺跡を平和のための文化財に」。初日午後の澤地久枝氏の講演に期待して300人が全国から集まったが、3週間前から健康悪化とのことで中止、ピンチヒッターとして白井厚慶応大名誉教授の「戦時下の慶応義塾と戦争遺跡」の記念講演が行われた。

1933年、小泉信三氏が塾長になってから、いかに海軍に全面的に協力し、後の日吉台地下壕にみられるように、慶応義塾が戦争体制に深く組み込まれていったかの史実が興味深く述べられた(その他の開会行事についてはすべて省略)。

記念講演のあと十菱駿武全国ネット代表が基調報告「戦争遺跡保存の現状と課題 2011」を行ったが、その中で市川の“赤レンガ”についてもスライド付きで紹介された。その後、沖縄における戦争遺跡の現状と今後の課題、日吉の戦争遺跡の特徴(1988年から調査開始)、昨年春開館した明治大学の平和教育登戸研究所 資料館(陸軍第9技術研究所跡)がそれぞれ詳しく報告された。

2日目は朝9時半から夜5時まで、①保存運動の現状と課題(54人参加、レポート8本)、②調査の方法と整備技術(40人参加、レポート8本)、③平和博物館と次世代への継承(40人参加、レポート7本)の3分科会が並行して行われ、各地の粘り強く多彩な活動が紹介され参考になった。その後の閉会(全体)集會では各分科会の報告が15分づつ。その後、大会アピールと市川の“赤レンガ”についての特別アピール(高野が読み上げる、次頁参照、赤レンガのリーフレットを各分科会で配布)が満場の拍手で確認された。

3日目は戦跡めぐりで①日吉地下壕、②明大平和教育登戸研究所資料館、③横須賀軍港と猿島要塞めぐり、④貝山地下壕と“野島掩体壕(日本最大)の4班に分かれ、すさまじい炎天下の下で歩き回った。小生は予科練発祥の地でもある④の横須賀コースに参加し、かつての広大な軍用地がニッサン追浜工場その他に払い下げられている実態を確認出来た。



※ 来年の第16回戦争遺跡保存全国シンポジウムは、2012年8月18日(土)～20日(月)の3日間、三重県鈴鹿市で開催されます。全体会・分科会の内容については報告文書があるので、ご希望の方は事務局に連絡していただければコピーを提供できます。

赤れんがの保存要望が決議されました。

同シンポジウムにて、わたしたちの愛する赤レンガ建造物の保存と有効再生利用を求める要望が参加者の満場一致の拍手の基に決議されましたので、要望書を次頁に掲載します。

千葉県旧血清研究所跡地の赤レンガ見物の保存を求める要望

千葉県市川市国府台2丁目、国府台の南端にある旧千葉県血清研究所跡地には、旧陸軍の赤レンガ建造物が存在します。この建造物は、次のように、歴史的かつ文化財的価値が極めて高いことが確認されています。

- 1、明治30年代建造と推定され、県内最古の赤レンガ建造物と認められます。
- 2、明治時代以降の市川市は、営々と築かれた日本陸軍の強力な「軍都」でした。この赤レンガ建造物は陸軍教導団、そして陸軍野砲兵旅団司令部や陸軍施設の倉庫として使用されていたと推定されます。戦後は千葉県血清研究所の薬品倉庫として使用されました。この赤レンガ建造物は市川市内で唯一残る戦争遺跡です。
- 3、赤レンガ建造物は良く設計されていて、明治期の赤煉瓦造建築として極めて保存状態が良好です。
- 4、現状を保ちながらの復元や登録文化財に指定すべき価値、並びに有効再生利用が十分可能です。
- 5、旧血清研究所施設の他の建物の一部も十分再生利用価値が高いといえます。

現在、この建造物と敷地は千葉県が所有しており、2010年度には敷地内の土壌調査も実施されましたが、検出された有害物質の数値は低いものでした。しかしながら、現在もまた近い将来にも県としての利用計画は立てられぬままになっています。

一方で、この隠れた歴史的建造物の存在が広く市民に知られるようになり、市民による「赤レンガをいかす会」が昨年結成され、その保存と有効再生利用を求める要望が高まっています。私たちは、市川市民が最も好きな景観として挙げる江戸川からの国府台台地の眺めのまさに中心にあり、かつて「軍都市川」の象徴でもあったこの歴史的建造物が、市川市民だけでなく全国民にとっても貴重な財産となり、新たに平和・環境・防災・芸術文化活動の拠点として甦ることを願ってやみません。

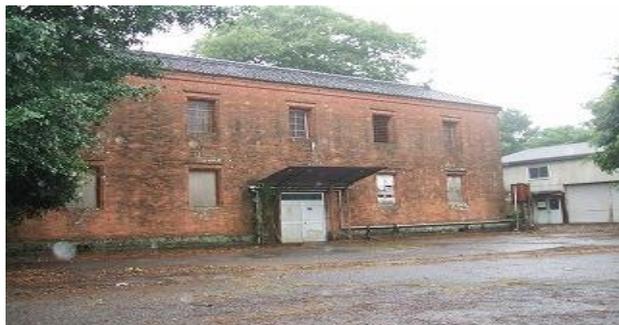
私たちは、この赤レンガ建造物に関して、下記の事項を要望します。

記

- 1、この赤レンガ建造物の文化財調査を実施して、国の登録有形文化財あるいは千葉県・市川市の指定文化財に指定し、保存すること。
- 2、この赤レンガ建造物の有効再生利用は十分に可能であり、また、旧施設内の他の建造物にも近代建築としての価値の高いものがある。赤レンガ建物を平和のための展示資料館として活用し、旧施設全体の保存と再生有効利用に向けた「平和国際芸術センター(仮称)グランドデザイン構想」や「施設再生総合プラン～防災拠点並びに国際芸術センター～」を、市民と行政の協働により、具体化できるよう検討されること。

2011年8月7日

第15回戦争遺跡保存全国シンポジウム神奈川県横浜大会



保存会の皆様
ご支援ありがとうございました。
文化庁長官、千葉県知事、市川市長、宛に要望書
が提出されました。

赤レンガの建造年を巡る到達点

血清研究所元職員 鈴木一義

1. 「明治 37 年之建」の手記と「明治 36 年竣成」の木札



千葉県血清研究所 30 年誌の佐藤寛三氏の手記「思い出」の中に「梁の上ののせてあった板片に明治 37 年之建と墨書き」とあり、これが現存する赤レンガの建造年と考えられてきました。

しかし、近世建築物に通じる当会の日大 藤谷教授は「明治 37 年建造なら県内最古の赤レンガ建築と考えられるが、手記だけでは――」と話していました。

そんな時、元血清研同僚のSKさんから「竣工年月日等墨書きの板片を見た」とのメールが入り、早速関係者に問い合わせ、県の担当者に探索をお願いしたところ、昨年 2 月末に発見した木札の写真が送られてきました。

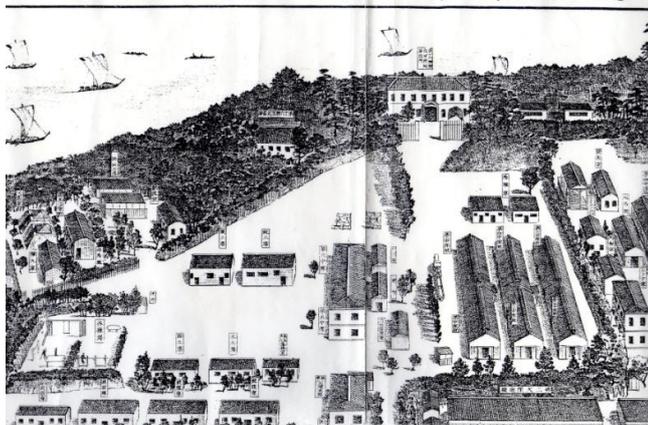
しかしそこには「起工明治 36 年 3 月 6 日 竣成全 36 年 3 月 31 日」との墨書きがありました。

2. 赤レンガ建造年に関する問題点



血清研には現存赤レンガのすぐ南側に、より大きい赤レンガ建築があり(写真左)、昭和 45 年に取り壊されています。

野戦砲兵第 1 聯隊及第 16 聯隊兵營の図



市川市立博物館所蔵の明治 34 年 10 月印刷の「野戦砲兵第 1 聯隊及第 16 聯隊兵營の図」の中に、この赤レンガと形と位置がよく合う「第 16 聯隊武器庫」と記された 1 棟のみの建物が描かれている(写真左)。

シンポジウム参加の千葉県袖ヶ浦郷土博物館の能城秀喜氏が「陸軍ではレンガ造りのフランス積みは明治 14~20 年頃にイギリス積みに変遷しており、この赤レンガも明治 10 年代の建築のはず。明治 37 年の板片は屋根をふき替えた際の棟札と考えられる」とのメールを寄せている。

当会の建築家高木彬夫さんは「まだ 50 代の佐藤さんが年代を間違えるとは考えにくい」、「この赤レンガがわずか 25 日間で建造されるのは無理」と考え、血清研の古い職員との面会を希望していた。

3. 「寛ちゃんの木札を私は見た」と鳥山さん

そしてようやく昨年 10 月佐倉で、高木さんと共にお二人の職員と面会できました。ともに昭和 25 (1950) 年入所で、9 歳年上で今もお琴の先生をされている鳥山貞子さんは、今はない赤レンガの、所長室、事務室、講堂のある二階で庶務をされていましたが、「寛ちゃんが書いた「明治 37 年之建」の板片を二階の講堂で見た」と言い、発見された板片写真とは違うとはっきり否定しました。写真の板片よりは小さく、上記の墨書きがありこんなに多くの文字はなかったとのこと。そうすると「明治 37 年之建」は壊された赤レンガの建造年であると想定され、明治 34 年印刷の絵図に 1 棟のみが描かれていたことと符合します。そして発見された「明治 36 年竣成」の板片は現存赤レンガがリフォームされた時のものと考えれば上記疑問点が一気に解消します。赤レンガの建造年は次第に絞られてきたようです。

赤レンガの思い出(昭和 40 年代)

私は東京オリンピックのすぐ後、一中と国府台高校に通った。その頃は、国府台のそこかしこに軍隊の痕跡が残っていた。

旅団坂の上には、歩哨のいたコンクリートの哨舎があった。その後には、草の中に旅団司令部の一部と考えられる建物の土台が残っていた。この建物は戦後、市川簡易裁判所などとして使用されたようだ。

聾学校の後には、弾薬庫の跡があった。3～4メートルの高さの土手で口の字型に囲まれていた。一辺の長さは3～40メートルぐらいあったらどうか。遠くから見ると、草に覆われた台形の小山のように見えた。そしてこの入り口にも哨舎があった。それから馬に水をやる水槽、何棟かの古い兵舎など…。高校の構内には2階建ての兵舎が残っており、教室として使われていた。

そんな情景の一つとして、赤レンガの建物も残っていた。一中の校舎の3階から見ると全体がよく見えた。雨上がりの午後など、雨に洗われた赤レンガが西日に輝いていたのをよく覚えている。瀟洒な建物だと思った。当時、軍隊の何に使われたのか疑問に思ったが、それを知る人もいなかった。

軍隊の痕跡は、昭和40年から45年にかけて次々に壊された。高度成長期のすさまじい時代だった。戦争の記憶から早く逃れたいという気持ちで、大人たちには強かったようだ。当時としては、それもやむをえなかったと思う。ただ哨舎が壊された時には、子供心に、昔の国府台を思い起こすために残しておいてもよかったのではと思った。

それから40年以上、国府台から軍隊の痕跡はすっかりなくなった。建物としてはもう赤レンガしかない。国府台の軍隊を偲ぶ遺跡として、いつまでも残しておいてほしいと思う。 中島行雄

明治初期のものと期待

私は昭和53年1月から、市川2丁目(駅まで5分)に住んでいます。

私は国土交通省(旧建設省)で、道路、河川、砂防、ダム用地取得の仕事を36年間やってきました。その中で、庭などにある樹木の名前をよくわかるようになり、いろんな建物の構造など(自分たちで調査をやっていた頃もあった)がよくわかるようになりました。

そのため、緑のある町並みや建造物を見て歩くのが好きで、旧血清研究所の敷地に入り赤レンガの建物も二、三度見ていましたが、最近建物の中まで見ることができて、軍都だった市川市の唯一残る旧陸軍の歴史的建造物として、なんとしても残すべきだと強く思うようになりました。

これまでは、赤レンガ建造物は「明治37年築の建築」というのが定説となっていたが、最近見つかった墨書きの木札には、工期がわずか25日でしかなかったことがわかり、そうなることは建築ではなく改修時期を記録した木札ではないかと、つまり建築はもっと早い時期だったと推量できるわけです。そしてまた、この赤レンガ建造物が富岡製糸所(明治5年)など明治初期の建築に多く用いられたフランドル(フランス)積みであることから、輪が愛する赤レンガ建造物も明治初期のものではないかと期待しています。 市川2丁目 安部武弘

レンガの色、風合いに魅せられて

これまで2回の見学会に参加しました。遠い明治に造られ、軍が長年使い、戦後は血清研究所がずっと使っていたと聞いていたので、きっとボロボロになって、かなり汚れているのだろうと想像していました。ところがです。初めて見る赤レンガ建築のどっしりとした構え、風雨にさらされた外壁のレンガの、長い歴史を感じさせる重厚な色合いにまず魅せられました。傍に立つ銀杏の大木ともつり合い、なかなかの景観です。

2階へ上がり、驚いたのは内壁のレンガの保存状態がとても良く、レンガの柔らかな色と独特の風合いが何ともいえずイ感じだったことです。これは残すべきだと直感しました。

忌まわしい軍国主義、その戦跡としての保存価値・意味もさることながら、赤レンガ独特の持ち味を生かせる活用を期待しています。 中国分2丁目 戸田節

赤レンガを創造する

吉原廣

紙面が余ったので、雑感を記載します。

初めて赤レンガと出会った時の感動を忘れることができません。「軍都市川」の歴史を語る数少ない戦争遺跡として、それは静かに寂しげに、そして、さりげなく佇んでいました。横浜や金沢などのものはや観光名所と化した赤レンガ建築の派手さと比べてもどこか素朴さに包まれているその姿に、「そうか、お前も生き残っていたのか。誰にも知られず、誰に叫ぶことをせず、周りの仲間がどんどん壊されていくのをジーンと耐えながら、一人生き残ってきたんだなあ。寂しかったろうなあ」と声をかけてやりたくなくなりました。

それから、この可愛い赤レンガを残してやりたい、ただ残すだけでなく、現在と未来の我々市民の暮らしの中に溶け込めるように有効再生利用という形で、何とか役立つようにできないものだろうかと皆で話し合ってきました。

かつての戦争悲劇を決して繰り返すまいとする歴史資料館として、現在の貴重な環境保存の象徴的拠点として、未来の地球的平和交流の芸術活動センターや市民活動拠点として、そして3.11東日本大震災の教訓からの新防災拠点として、この素朴な赤レンガ建造物と周囲の近代建築群とをもう一度甦らせられないものかと夢想してきました。

とはいえ、肝心の所管者は千葉県です。県との話し合いの中では、財政難ゆえでしょうが、何の再利用計画もありません。一時譲渡を要望していた市川市も同じ姿勢です。このまま塩漬け状態が続くのか、いつの間にか破壊されてしまう危険性はないのか、といて、われわれ市民だけでは手の打ちようもありません。そんな虚しさを感じつつ、せめて沢山の市民に赤レンガの存在を知ってもらおう、みんなで面白がって再生構想の夢を描いてあげずに呼びかけていこうと思っています。

僕はこの十年、縁あって市川市民との市民ミュージカルや障害児・者を中心としたチャレンジド・ミュージカルなどの舞台づくりに作・演出として関わってきました。今年12月の故・井上ひさし顕彰市民公演第1弾「それからのブンとファン」もその一つです。井上さんは1967年から20年間、市川市国分に住んで多彩な執筆活動を展開されていました。

その井上さんの戯曲に「きらめく星座」があります。昭和16年、浅草のレコード店を経営する家族の息子が国府台にあった砲兵連隊からの脱走兵として登場します。大層音楽好きの男には耳元で鳴る大砲の轟音に我慢ならなかったゆえの脱走でした。

その男が、あの赤レンガの中で今日までひっそりと生き残っていたと想像してみます。もちろん魂として、幽霊として生きつづけたわけですが。そこへ(以下はすべて市川を舞台とした井上作品です)、行徳富士の下水処理施設建設のために追い出された「十二匹のねこ」がやってきて、途中「ドン松五郎」や「野球盲導犬チビ」などの犬たちと合流、それどころか「偽原始人」の三人の少年や「空きかんユートピア」の老人たちとも協力しあって数々の騒動を引き起こしながら、赤レンガの廃墟に逃げ込んでくるのです。

赤レンガの扉には「下の畑に居ります」の掛札が下がっています。もちろん井上さんの愛した宮沢賢治の亡霊ケンジ君が登場するわけです。井上ひさしの亡霊幼いヒサシ君も絡んで、まるで「吉里吉里共和国」のように、「市川国府台の廃墟に新しい羅須地人協会を、イーハートーボ・ユートピアを建設しよう！」と夢想して舞い踊っていきます。

そんな浮かれ屋や面白がり屋たちの夢物語を、2年に一度公演する来年のいちかわ市民ミュージカル第6回公演で舞台化しようかと考えています。

いずれ、「赤レンガの唄」や「赤レンガ句集」「子どもの描いた赤レンガの夢画集」といったイベントなども呼びかけていくのもいいでしょう。行政が重い腰を上げざるを得なくなるまで、我々市民の面白がり精神を満載にして、子どもたちの未来を豊かにしていきたいと願っています。

ご一緒に夢を描きましょう。